

# 自然の中を歩こう

(2010.1.05)



昔幼稚園に来ていた元学生が、久しぶりに集まった。それぞれ教育学、体育・医学博士になって、今では大学教授になっている。飲み、かつ語るうちに、やはり、子ども達の話になった。子ども達の歩き方、走り方がおかしくなっているという。本園では見かけないが、まるで赤ちゃんのようなヨチヨチ歩きだったり、まともに走れない子がいる。園外に散歩に行くと、すぐに「疲れた!」「もう歩けない!」とベソをかく。走らせるとヨタヨタ走り、ころぶ。「疲れを知らない子ども達」なんて昔の話である。

近くに行くにも車。歩かない。思いきり遊ばないので走ることもない。子ども達は歩いたり、走ったりする体験が少ないのである。人間は直立二足歩行するようになって、飛躍的に発達したというが、歩かなくなった人間は、どうなってしまうのだろうか。スポーツクラブの活動の時だけ体を動かすが、日常的にはほとんど歩いたり走ったりすることがなく、遊んでいる姿がなくなった。

生活環境が子ども達の活動を奪っている。近年はエアコン完備を売り物にしている幼稚園、保育園が増えてきた。エアコン完備の幼稚園とそうでない幼稚園、エアコン設置前と後で、子ども達の活動量がどう違うのか調査したところ、エアコンを設置していない園の方が子ども達の活動量、外遊びの量が圧倒的に多い結果となった。暑い時に暑さを避ける涼しい木陰を作り、自然の中で育てなければならない。「人は環境の子なり」と言うが、歩かない、走らない方が楽であるし、自然環境を破壊し、人工的に作り出した温度調整の行き届いた環境の中で生活することにより、環境破壊の悪循環を生み、さらに子どもの体力まで奪っている。

昔、取手ふたば文化幼稚園では、朝早く幼稚園から小文間の近くにあった小堀の渡しまで歩き、渡し船に乗って対岸の牧場に行き、そこで遊んだ後、向こう岸の土手を歩いて、大利根橋を渡って園まで帰る、10キロ以上の「遠足」をよくやっていた。本園では園外に散歩に行くことを、大いに奨励している。鬼ごっこ、サッカー等、走る遊びもたくさん取り入れている。4月には、ヨタヨタ走っていた子が、今ではまるで別人の様な走り方をしている。しかも、競争やリレーをすると、エンドレスで何度も何度も走りたがる。子どもは本来活動的で動き回るものである。子ども達をもっと歩かせ、走らせましょう。

## 言葉の重み

(2010.2.01)



真剣な顔をして、卒園生のA君のお母さんが「園長先生！先生に一言伝えたいことがあります」と言いました。私は、ドキッ、として何か文句を言われるのではないかと身構えました。

「実は、小学校三年生になるお兄ちゃんが、幼稚園の年長の時、いつもリレーをやると、みんなに追い抜かれて、幼稚園に行くのも嫌になっていたある日、クラス対抗リレーの練習があって、その日もみんなに追い抜かれて悔しい思いをしてうつむいていると、園長先生が『今日一番良かったのはA君です。A君は追い抜かれても諦めないで最後まで全力で走っていました。だから昨日より、早く走れるようになっていたと思います。一生懸命走っていると、段々早く走れるようになります』と言って、A君を高く抱き上げてくれたこと、そして、そのことがとても嬉しくて今でも忘れないでいる。」というお話でした。

私は、とても申し訳ないが全く、記憶にありませんでした。だから余計に、胸にズキンときて感激してしまいました。私の些細な言動が、これ程までにA君の心に響いていたことは感動です。私の方こそ、心から感謝しなければなりません。

一言の言葉の何と重いことでしょうか。このことは反対に、もしかしたら、何気なく言った言葉で、人を傷つけていることがあるかも知れません。自分では、そんな意図で言ったことではないのに、受け取る人の立場によって、全く違う意味にとらえられてしまうこともあります。多くの人に読んでもらう文章では、多くの人々の立場に立って考えなければなりません。また、子どもは感受性が強いですから、子どもだからと言って、軽率な言葉は慎まなければなりません。子ども達の心に寄り添い、今、子ども達がどんな思いをしているか、しっかりととらえて言葉かけをしようと思います。

## それが人生

(2010.3.05)



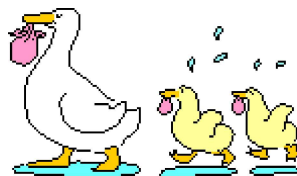
ある幼稚園で、子ども達が節分で使う豆を入れる容器を作っていた。色々な材質の紙類と、ハサミと糊、セロテープ、ガムテープ、ホッチキス等が用意されていた。小さなカップ一杯分の豆を入れる容器を自由に作るのである。

3歳のクラスでは、紙を二つ折りにして封筒状のものを作ったり、丸めて筒にしたりしていた。テープで貼り合わせるのだが、横にテープを貼ると、貼ったテープとテープの間に隙間ができてしまい、間から豆がザーとこぼれ落ちてしまう。何度も補修し、その隙間をテープで止めたり、あるいは、下部を折り曲げてテープで止めるが横に開いたりしていた。

4歳になると、カップの様な型や立方体の箱を作っていた。容器が小さくて豆が入りきれなくなったりすると、さらに上に継ぎ足したりしていた。

5歳になると、正四角形の立方体の容器に手を付けたり、カップ一杯分の豆が丁度入る程度のしっかりしたボール紙の箱を糊とホッチキスを使って作るのだが、それぞれがみんな違っていった。紙と紙を合わせ、そこをホッチキスで止めようとするのだが、片手で紙を押さえ、片手でホッチキスを使うのに、悪戦苦闘していると、隣の友達が手を貸して協力して作っている姿もあった。又、隣の子の作り方を見て影響を受けたりしていた。文章でその様子を伝えるのは非常に難しいが、教師が見本を作って見せ、教えたとおりに、同じものを揃って作るのではなく、工夫し影響し合い、教え合い、模倣し、協力し合って、それぞれが個性的で独創的な物を作っていた。5歳児が二人並んで作っていたのだが、糊をつけてははがれてしまったり、完成したと思ったら豆が全部入らなかつたりして、試行錯誤し、失敗を繰り返しているうちに、隣に座っていた子が、うまくいかない自分に腹を立て「もう、止めた！」と言い出したところ、他方の子が「失敗し、やり直し、繰り返し、それが人生だ！」と言った。私はその言葉にびっくりしたり、おかしくなったり、感動してしまったりした。

そうなんです。幼児期はいっぱい失敗したりやり直したりして、成功する体験の中で発達していく時なのです。まさに幼稚園は、人生で最も必要なもののほとんどを学ぶ場なのです。



# こどもの楽園

(2010.4.05)



4月の幼稚園のねらい（目標）は、幼児理解—全面的受容—信頼関係の構築です。幼稚園は「子ども達の楽園」です。楽しくなければ「幼稚園」ではありません。

しかし、四月入園したばかりの子ども達の中には、泣きたいくらい不安と緊張で、身を硬くしている子もいます。思いつき大声で泣き、「こんなところイヤだ！お母さんと一緒にいい！」と暴れる子もいます。こんな時に、一番大切なことは幼児理解です。子ども達の思い、心を、しっかり理解し、全面的に受容することです。親と一緒に不安になって泣いたり、「泣くんじゃない！」と目をつり上げていると、子どもは一層不安になったり、目をつり上げて暴れるようになります。

自分の思いのままに泣けるなんて、素晴らしいと思いませんか？この時代にしか、こんなに泣けませぬ。「お母さんから離れて、見知らぬ、訳も分からない、うるさい奴らと一緒にされて、僕は不安で心細くてイヤなんだ」と思うのは当然です。「先生は優しいよ、お友達と一緒に遊べるようになると楽しいよ」と、伝えて下さい。

子ども達が一日でも早く、自分の心に折り合いを付け、それを自ら乗り越えることが大切です。幼稚園が楽しく思えるようになるまで、温かく待ちましょう。「泣きたいだけ泣いていいよ」と、ゆったりと受け入れ、にこやかに手をつないだり、見守ることです。子ども達はきっとすぐに、先生大好き、幼稚園大好き、と言ってくれるようになります。



## 江戸しぐさ

(2010.5.07)



地下鉄のエスカレーターを降りていくと、怒鳴り合う男の声が響き渡っていた。肩がぶつかり合ったかどうかであろうが、今にもつかみ合いになろうとしていた。こういう光景を見るのも嫌だ。うんざりする。危険なので、すこし遠くから「お互い様なんだから、止めようよ」と声をかけると、私をにらみつけながら去って行った。電車に乗ると、混雑して立っている人もいるのに、大股を広げ二人分を占領して、携帯の画面に夢中になって指を動かしている男がいた。肩がぶつかった、と言って殺傷ざたにまでなる事件がよくある。

こういう類の人間は、幼児期にしっかり躡られていなかったのかと思いながら、幼稚園での光景を思い出した。二人の子が廊下にしゃがみこんで、一方が泣きじゃくり、他方が「ゴメンネ、ゴメンネ」としきりに謝っていた。どうやら、廊下ですれ違いざまに衝突して、体の大きい子が小さい子を、跳ね飛ばしてしまったようである。しばらく様子を見ていてから、二人のところに近づいて「どうしたの?」と問うと、「ぶつかったの」と。「どうしてぶつかったの」と言う。「走ってきたから、ぶつかったの」と言う。「廊下を走っては人とぶつかったりするから、走ってはいけないんだよ。前を見て、ゆっくり歩いていればぶつからないけど、走りながら脇見などすると衝突してケガをすることになるんだ」と言う。二人はうなずいた。

江戸っ子は三代続かないと「江戸っ子」と言われなかった。私は、東京の下町で生まれ育ったが、私の周囲を見回しても、みんな父母・祖父母の代に、地方から出て来た人ばかりであった。各地から集まり、門閥や身分にとらわれない自由人が、三代かけて自分を磨き上げた者が「江戸っ子」として認められた。江戸の町は、大半が広い武家屋敷であって、各地から集まった町民は、狭い地域にたくさんの人がひしめき合って暮らしていた。町民が狭い所でも、楽しく、仲良く、居心地の良い生活をするために作ったのが「江戸しぐさ」である。

江戸しぐさの中に「往来しぐさ」というものがある。…すれ違う時、軽く会釈をして「肩引き」をして、互いにぶつからないようにするとか、雨のしづくがかからない様、相手と反対側に「傘かしげ」をするとか、後の人のためにちょっと「こぶし腰浮かせ」をして、こぶし一つ分位に譲れば空きができる。こういう姿が「粋」、つまり格好いい。それができないのが「野暮」と言うわけである。町人は、子ども達を粋に躡をした。今の子ども達も「粋」な人間になってもらいたいものです。



## 手紙～拝啓15の君へ

(2010.6.01)



昨年6月初め、新緑の軽井沢へ出かけた。真っ青な空の下、爽やかな高原の風を切って、サイクリングと洒落てみた。美術館を見たり、洒落たレストランで休んだりしながら、キラキラと木もれ日の中を、小川のせせらぎに沿って、静かな湖面に銀輪を映し、軽快に走った。午後、たまたま通りかかった「大賀ホール」で、県立高校の、全国大会受賞を兼ねた吹奏楽部の演奏会が開かれていた。

軽い気持ちで飛び込んだが、思いがけない程の感動を味わった。卒業生のプロの演奏家とのコラボ、受賞曲の演奏等に酔いしれた。そして、最後に全員による合唱。アンジェラ・アキの「手紙～拝啓15の君へ」には心が震えて涙が出た。横に居るカミさんの横顔を見ると、同じように涙していた。

この歌は、今でも中高生の合唱祭では、最もよく歌われている歌だそうである。テレビやラジオで、何度も聴いている時は、何も感じなかったが、目の前で高校生のすがすがしく歌う姿と、澄み切った声が私の心に響いた。

15歳の私が、未来の自分に手紙をつづり、懸命に訴え問いかける。「今、負けそうで泣きそうで消えてしまいそうな僕は、誰の言葉を信じて歩けばいいの?」と、そして、未来の自分はこう答える。「大人の僕も傷ついて眠れない夜もあるけど」「自分の声を信じて歩けばいい」。

私もあの頃、あんなに、思い切り青春を謳歌していたけど、先の見えない未来に向かって、いつもこれからの自分はどうなるんだろう、どうしたら良いのだろう、と不安と怖れを抱いていた。私達は「今の若いやつ等は…」と嘆きがちだが、今の時代の方がずっと先が見えず、不安定で苦しい。今の若い人達の方が、ずっと辛く、苦しい時代なのかも知れない。「大丈夫だよ、自分を信じて、自分のやりたいことを思い切りやろうよ。こんな私だってどうしたらいいか、不安になることがあり、君達と同じように、悩み、問い続けているんだよ」と答え、応援したい。そして今年も、彼等の演奏と歌を聴きに、軽井沢に行きたいと思っている。



# 生きるエネルギー（その1）

(2010.7.02)



「亭主、元気で留守がいい」と言うが、私の友人のほとんどが、もう定年退職して家にいる。彼等企業戦士は、家庭を顧みる暇もなく、外で元気に働いていた。しかし、定年になったとたん、急に奥さんに冷たくされ、邪魔者扱されるという話を良く聞く。子育ても終わり、ほっとして、やっと自分の時間を獲得した奥さんは、亭主が留守の間は自由を謳歌し、友人とランチをしたり、映画を観たりしていられたのに、突然、ぬれ落ち葉に、一日中家の中でゴロゴロされると、ウンザリして冒頭のような言葉が生まれる訳になる。

外で元気なのがいいのは、亭主ばかりではない。子どもだって、外で元気な方がいいと思うのだが、昔、ある保護者から抗議を受けたことがある。「先生は、元気・元気と言いすぎる。元気でない子だっているのだから・・・」とのことであった。しかし、「元気でなくともいい」とは言えない。やはり、子どもは元気な方が良いと思う。外を見ると本園の子は、この暑さの中、真っ黒になって友達と駆け回っている。「元気」とは「健康で勢いの良いこと」「活動の源となる気力」と広辞苑に書かれている。健康であることが第一だが、「心」も「体」も健康でなければ元気とは言えない。

若者に元気がなくなっている。若者の自殺が増え続けている。自殺した若者の遺書では、「何もかも嫌になった」「生きていてもしょうがない」「生きていることが苦しい」と告白している。むなしさ、空虚感、この世に生きる意味や、目的を感じられず「生きることに疲れた」と表現している。ちょっとショッキングな内容だが、自殺対策が進んでいるフィンランドの興味深い報告がある。81年生まれの5302人の追跡調査、24歳までに51人が自殺を図り、15人が死亡、自殺に至る経過から、男性の78%は8歳の時点で自殺前兆を示していた。小学校低学年で、生きることを苦しいと感じるようになり、若者になるまでに自殺の意思がはっきりとし、常に自殺の機会を探すようになる。

子ども達が、生きるって楽しい、人と一緒にいることが楽しい、周囲のみんなに認められている。お父さん、お母さんは私をいっぱい愛してくれていると、人との絆がしっかり結ばれていれば、自殺なんかできるものではない。子ども達にとっては、特に、親の愛情と信頼こそが生きる力になり、意欲・気力・やる気の原因になるのである。幼児期から、やりたくない、辛いことを強いられていると、子どもは生きることを否定するようになる。

赤ちゃんの時には、泣いたり、笑ったりして、大人に伝えかけてきたら、目をかけ、声をかけて、沢山かまってあげること。幼児期には、興味・関心を引き出し、知的好奇心を刺激し、学んだり、知りたがり、やりたがる「意欲」を育て、人の心を知り思いやりの「心情」を育て、生活のリズムを整え、身の周りの生活習慣を自立させる「態度」を育てることが、生きるエネルギーになり、後になって伸びる力になる。（・・・続く）

## 生きるエネルギー（その2）

### 【あと伸びする子と失速する子】

(2010.9.01)



大学で教鞭をとる友人が、「今の学生は学力が低いことより、むしろ、勉強する気がないことにびっくりする」と言っていました。昨年発表されたOECDの学習到達度調査で、日本の15歳が自分で勉強する時間は1日25分で、調査に参加した32ヶ国中最低、先進国の中で、突出して短かったのです。「学びからの逃走」と学習意欲の低下を警告してきた東大の佐藤教授は「日本の子どもはいまや、世界一学ばない子ども達だ」と言っています。

面白い調査結果が、国立青少年教育振興機構から、発表されました。子供時代に外で活発に遊んだ人ほど、本を読む割合や大学進学率が高い・・・調査に携わった教授は「子どもが外で遊ぶことで、探究心や知的好奇心を刺激し、学習意欲を向上させるのではないか」と言っています。遊べなくなった子ども達は、20～30年前から、体力、運動能力を低下させていますが、特に知的な側面では、「工夫する能力」や「分析し判断する能力」が、情緒や社会性の側面でも「コミュニケーション能力」が低下していると指摘されています。昔から、子ども達は、全身を使った遊びを通して、自然にこれらの能力を体得してきました。

幼い時は、大人の圧力で猛勉強を強いられると、確かにその時は伸びるが、勉強することが嫌なこと、辛いことであることを、心の底から学習し、体と心に汲み込ませてしまい、中学後半から高校位になると、ドロップ・アウトする子が多くなります。本来、学習効果が上がるのは、楽しい、やりたいと、本人の意思でやる時こそ上がります。

本園の目標の一つに「楽しくなければ幼稚園ではない！」という言葉がありますが、幼稚園は決して勝手に遊ばせているだけではありません。しっかりとした教育課程、指導計画に基づき、計画的・意図的に行っております。従って「楽しい」中味は、ただ楽しいだけでなく、時として子どもに苦しい負荷を与えることがあります。それは決して、子ども達に過度の苦痛を与えるものではなく、少し努力すれば乗り越えられるもので、クリアする度に、大きな「喜び」を与えられる「真に楽しい」遊びです。遊びは、自ら挑戦し、何度も失敗しながら成功を体験するものです。わくわくするほど、心を躍らせる冒険や、知的好奇心を刺激します。そこから、学習の基礎、生きることの源泉となる意欲や自発性、自主性を育てていきます。幼児期には時を忘れ、夢中になって、体を使った遊びをいっぱいして、ご飯をいっぱい食べて、ぐっすり眠る健康な生活のサイクルを守って欲しいと願っております。





## 「豊かな心」を育てる

(2010.10.01)



私達大人は、いつも競争社会の中で生活してきたので、競争に負けてはならない、他人よりもっと早く、もっと多く、もっと強くと要求されて来ました。だから私達は、子ども達にも、より多くのことを要求するようになり、みんな余裕がなく、早く早く、もっとたくさんと望みます。しかし、それがはたして幸せなことなのでしょうか？人間らしい生活なののでしょうか？子どもらしい生活なののでしょうか？どんなに強いゴムや紐でも、いつもピンと張りつめていたら、いつかきっとその緊張に耐え切れず切れてしまいます。のびたり、ちじんだり、ダランと休んだりしなければ持ちません。

人間らしい生活をするのが、今、求められているのではないかと思うのです。人間らしい生活とは、その時代、その年代にふさわしい生活です。幼児期には幼児期にふさわしい生活をしなければなりません。幼児期は“遊び”こそ生活です。そして、伸び伸びと思い切りふれ合い、戯れ、ふざけ合って自由に生活すること（遊ぶこと）こそ大切です。それが幼児期の生活の全てであると言っても良いでしょう。そうした生活の中で、人間として生きていくために最も大切なことの殆どを学ぶのです。

そのために大切なことの一つが「余裕」です。ゆったりとした時間の流れの中で、自分達の生活（遊び）をじっくり楽しむことです。そこから、生きるって楽しいな、生活するって孤独ではなく仲間と一緒になんだなと、だから、苦しいことも分かち合い、耐えられるようになり、楽しいことは、二倍三倍になって、より大きな楽しみになることを学びます。そして、そこにはルールがあり、ルールさえ守ればどんなことも自由にやれることも知ります。

豊かな心、豊かな感性、やさしい心・・・みんな余裕がないところには育たないと思うのです。時間に追われてギスギスしたところでは、気持ちまでトゲトゲして、とんがってしまいます。イライラした気持ちでいるとピンと張りっぱなしになってすぐキレてしまいます。草のしとねに寝て、青空をゆっくり流れる雲を眺め、渡る風の音、川のせせらぎ、むせかえる草と大地のにおい、その中で手足をウーンと伸ばして過ごすことが、ゆったりとした豊かな心を育てることになると思います。しかし、これは決して目に見えないのです。



## あなたのためだから！？

(2010.11.01)

NOVEMBER 

テレビのCMで、終業後に帰宅しようとしている部下に、上司が仕事をドサッと押し付け、とまどう部下に「あなたのためだから」と言う場面がある。このCMがどういう内容か分からないし興味もないが、「あなたのためだから」と言う言葉だけが心に残り、気になった。

大人は、子ども達が望まないことを「あなたのためだから」と押し付けることがある。明らかに嫌がっていることさえ、「あなたのためだから」と強要することさえある。本当は「あなたのため」と言いながら、自分の思いを求めてのめり込む。子どもの時にピアノを習っておけば良かった、もっと勉強しておけば良かった、との思いがつのり、その思いが子どもに乗り移り、子どもの思いとはズレたまま、自分の思いを求め、子どもに自分の思いを強要することになる。

受験教育にのめり込んでいった教育ママの体験談を書いた本が売れているそうである。自分の子どもを塾にやるようになり、塾の中での成績競争にのめり込み、エスカレートして、週1回の塾通いが週3回になり、次第に毎日ようになり、生活の殆どに勉強を強要するようになっていく。熱を出して学校を休んでも、塾は休まず行くようになる。当然、教育費も増え、家計も圧迫するようになる。ここまでくると、麻薬のようなもので止められなくなると言う。途中で撤退したり立ち止まることは、投資したお金を放棄するような気分になり、こういうことが本当に良い結果を生むかどうか分からないが、今更止められなくなる。

受験教育と似たようなことが、幼児教育の世界でもある。「幼児期には幼児期にふさわしい生活を」、と言い続けているが、子ども達の発達を守り、しっかりと育てていかなければならない。ルソーが「エミール」の中で、子ども達の発達課題を無視した先取り教育を批判し「不確実な未来のために、現在を犠牲にする残酷な教育だ。」と言っている。「親だって本当は遊ばせたいのよ」と口では言いながら、「でも、あなたのためだから」と、・・・。子どもは屈折する。子どもは「旬」のものだ。「今を思い切り生きられるのが、子どもの特権」のはずである。



## 自ら感じ、考えること

(2010.12.01)



突風が吹き始め、園庭の木々から、まるで吹雪のように木の葉が舞い落ちてきた。クルクルと回りながら、刺すように、ヒラヒラと舞うように落ちてくる無数の枯葉を、子ども達は追いかけてながら、誰からともなく「秋まつりだ、秋まつりだ、秋の終わりだ!」と叫びながら、天に手をかざし、踊るように園庭を走った。

そして、急に冷え込んだ次の日の朝「うーっ、寒い!もう冬だね」と職員室に駆け込むと、「まだ冬ではないでしょう。テレビの天気予報では、まだ冬だと言っていないよ」と言われた。私は妙に納得して「まだ冬ではないか…」と思った。それから、子ども達のところへ行き、「今日は本当に寒いなー」と言うと「今日は冬だよ!」と返ってきた。私は「そうか、今日は寒いから冬か・・・」と自問し、「この感覚はいいな」と思った。自然の中で、風や空気、木々に触れ、季節を感じ、豊かな感性が育っているのだ。

テレビの報道より、自分の感性の方が、やはり正しい。私達は、テレビや報道に惑わされ、自分で感じ、考える力を減退させられている。昔、大宅壮一が、テレビの普及に「一億総白痴化」と言ったが、もう一言加えるなら「一億総感覚麻痺」とも言える。余談になるが、私はワイドショーやバラエティ番組が嫌いである。したり顔のキャスターが、無責任な発言を繰り返し流し、年中「世論調査の結果は…」と権威づけ、大衆を洗脳している。どのチャンネルを回しても同じような内容が繰り返されると、視聴者は思考を停止して、暗示にかけられてしまう。政治家もマスコミと世論ばかり気にして右往左往し、些細なことでもヒステリックにあげ足をとる、足の引っ張り合いのあげく社会の足まで引っ張っている。

本園の子ども達は、枯葉が舞い散る姿を見て、「秋が終わると感じ」急に寒くなったから「冬を感じ」ただのだ。天気予報が伝えたこと、気象庁が発表したいい加減なことにはとらわれず、自分の膚で感じたことを素直に表現している。人間が人間として育つ、人間らしくあるためには、まず、自分の頭で考え、自分の膚で感じる大切である。

